二十周年に当たって思う

理事長　長﨑　明

なぜ我々は二十周年記念事業をやるのか。

まずもって、何の資金も権限もない会費制民間研究所が、世の荒波を掻き分け掻き分け、二十年間を必死に生き永らえて来たのだから、「自分自身を褒めてやりたい」ということである。しかし、ただそれだけなら慎ましく身内だけで祝えば良いではないか。

そこで思い付くのは「温故知新」という古めかしい論理である。「昔のことを研究して、そこから新しい知識や道理を見つけ出すこと（小学館、国語大辞典）」である。つまり、研究所の二十年を、よそ様と一緒になって客観的に研究してみようというのである。

その昔、武家の男子は成人になると元服し、一人前の大人に加えられた。戦前の帝国憲法下では、二十歳になると徴兵検査を受け、合格すると入営して戦争という名の人殺しの訓練を強制された。除隊後も赤紙一枚で「醜の御楯」として召集された。そんな物騒な時代に逆戻りさせたくないものである。

ところが、国内外で数千万の人命と引き換えに、ようやく手にした平和憲法と教育基本法を見直そうとの動きが、今また愈々かまびすしくなってきた。かって軍閥と財閥とが結託して天皇制を奉りあげたように、アメリカを絶対的存在に持ち上げることによって、無辜の民を「国家総動員」しようとしている。御真影に最敬礼し、教育勅語を棒暗記し、軍人勅諭の下で粉骨砕身し、天皇陛下万歳を唱えつつ戦死するのに、何の疑念も抱かなかった、そういう赤子に再びなりたくない。させたくない。それが「温故知新」の心であろう。

今後二十年たって、生きていて良かったと喜び合える、そういう教育研究所を続けて行きたい。この二十周年記念事業をそういう節目の行事にしたい。